

社会福祉法人

風土記

《36》

佐賀県

有明海の初夏の風物詩

「鹿島ガタリンピック」。

佐賀県鹿島市の干潟で今

年も5月に行われる。干

潟のあるじ・ムツゴロウ

顔負けの泥んこ大運動会

だ。全身を真っ黒にし、

遠浅の浜を走り、泳ぐ。

海外の参加者も近年は目

立つ。

その海辺から北西へ14



小佐々祖伝尼



義詮和尚



小佐々徹宗

済昭園(上)

が清楚なたたずまいを見せる。1708(宝永5)年に開山した臨済宗妙心寺派の禅寺だ。開いたのは江戸時代・

老人と子どもが支え合う

■子らと托鉢

(昭和3)年の光桂寺(当時・藤津郡五町田村)へ。生活保護法の前身「救護法」が翌29年に公布されたものの、貧しい人を助けるにほぼ同情しない時代であった。

ある日、一宿一飯を求め、貧しい男が光桂寺の山門をくぐった。第13住職の小佐々祖伝尼(1872~1948)は慈

寺の住職・義詮和尚(1860~1916)と結ばれ、4人の子を授かっている。第11住職として光桂寺へ移った和尚は2年ほどして亡くなり、28歳で病没した第12世(長男)をはさみ、禅尼の祖伝が第13住職の座にあった。

寺を頼る人はどんどん増えていく。障害者や孤児も。計20人ほどになったらしい。当時としては

の五男である。晩年を蓮池藩の主領地であるここで過ごした。福岡と長崎を結んで栄えた長崎街道25宿の一つだ。

榮姫は江戸へ興入れしたが19歳のとき夫を失い、京都・妙心寺へ入った。禅尼となり父と夫の菩提を弔うために実家へ戻り、「清涼庵」を建てた。後に、庵は悲願の寺院になった。

それから220年の時が流れ、話は1928

悲の心で迎えた。「食べ物を与えるのは簡単なこと。それだけではこの人のためになりません。働かず食べ物をもらうのは仏の教えに反します」。

田畑を耕させたのだ。禅尼の教え「一日不作、一日不食」(一日人のために尽くさないと、食べものものを通らない)である。

祖伝尼の名は津田ツデ。長崎県北松浦郡小佐々村に生まれた。村内の

大金の2千数百円を借金し、五町田村の婦人会を母体に養老院(定員15人)を建てた。苦しむ人を昭らかに照らして済う——「済昭園」の誕生であった。

「本尊の納まる本堂につながる庫裏に居室や食堂、台所を配し、子どもと老人が並んで、どこ汁などを食べたそうです」。

法人4代目の小佐々良徹理事長(69)と、

仏教福祉の原点、光桂寺



小佐々徹正氏



小佐々良徹氏

いま第17住職として父を継いで寺を守る長男・徹正さん(41)は養護老人ホームやケアハウスの施設長兼務がそう言いながら境内を案内してくれた。800

人のオーデিশンから郷土出身の作家・下村湖人原作の東宝映画「次郎物語」(1987年)

に兄役で選ばれ、出演したことがある。

鍋島藩ゆかりの、山や田畑が広がる寺領内の離れでも寝起きしたという。食料の十分な時代、職員、お年



光桂寺の山門

寄り、子どもが共に野に立ち、支え合う独自の文化を築いた全国でも珍しい実践として高く評価する研究者もいる。

法人が社会福祉事業へ第一歩を踏み出した昭和3年は、関東軍による張作霖爆死事件(中国・満州、6月)や昭和天皇の即位礼(11月)など多事であった。次第に戦時色を強め、戦地へ送るため内地の衣食は細っていく。助け合いの心で農業や婦人会活動にまい進する傍ら、祖伝尼は子どもらと共に托鉢もいとわ

■寺鐘も守った

こんなエピソードがある。三男・徹宗(1911~1963)が福岡県下の僧堂での厳しい修行に音を上げた。「最後までやりとげよ」。自ら切り落とした左手薬指を、血の手紙に付けて送っている(1938年)。禅尼の胸像の中に今も残っているが、励ましのかいあって最後までやり遂げ、ビルマ戦線から生還した徹宗は第14住職になった。

もう一つ。戦争の激化した1942(昭和17)年、大砲や鉄砲の弾にあてて金属回収令が発動された。軍部の寺鐘供出命令を禅尼は3度はおつけしている。「平和を守る鐘で人を殺す兵器は造れない」と。非国民扱いされ、乗り合いバスにも乗れなかったという。梵鐘はいつも「苦しみを逃れよ」と鳴り響く。

【横田】

社会福祉法人

風土記

《36》

佐賀県

「真偽は知らず、今日は長崎に「3日前の広島」と同じものを投下したというが一切発表はない。隠すつもりらしいのである」。作家・大佛次郎（1897～1973）は1945年8月9日に記した（『大佛次郎敗戦日記』草思社）。

い、うめき声を上げ、ホームにへたり込む人、タンスで運ばれていく人。「生存者たちの絵による証言」の黒いスケッチ（『長崎原爆被災誌第一』）



荒木啓雅
副施設長



小佐々裕
特養初代園長

人や子どもの定員を増やしていく。女児棟も新築した。だが、老人福祉法公布から3カ月後の1963（昭和38）年10月、戦地でかかった結核がもとで他界してしまう。計報に接したとき、妻・国子さん（1921～2010）は東京で福祉施設幹部研修の受講中であつた。

老人ホームと児童施設、さらに寺の運営が3

女性のパワーで躍進

原爆のキノコ雲がナガサキ上空を覆った2〜3日後、約70キロ離れた長崎本線・肥前鹿島駅（佐賀県鹿島市）には被ばく者が続々と救援列車で着き始めた。ひどい火傷を負

「巻」長崎編さん、1977年）は同駅の重苦しい様子を伝えている。

■原爆孤児も

光桂寺を核とする済昭園（佐賀県嬉野市）も被ばく者や原爆孤児を預かった。中国・満州から引き揚げてきた兄弟4人、大阪空襲で両親を失った

済昭園①



小佐々国子
第3代理事長

（同年12月）へ衣替えした園が、戦後の基礎固めに入る創成期である。このころ第2代の理事長兼園長職には、創始者・小佐々祖伝尼（1872～1948）の跡を継いだ三男・徹宗和尚（1911～1963）が就いていた。1953年前後のこと。足の不自由なお年寄りをおぶって湯舟に入り、身体を洗ってあげる和尚の姿が園児の眼

88年）。福祉の原点だ。社会福祉協議会などで活躍、しついに厳しいところもあった。とほしい衣食をアメリカからのララ物資で補いながら、建て増しして老

代目を継いだ国子理事長の肩にのしかかる。しかも、幼い3人のわが子を育てながら。「夜も寝むられない」と打ち明けている（『50年のあゆみ』1978年）。



昭和63年、初めて幕内力士になった佐賀昇関

卒園生に佐賀昇関も



イモの収穫（昭和31年、園の玄関前）

京オリピック（1964年）に招かれ、喜んで上京した子。成人して全国各地に散っているが、さまざまに顔が来ては去っていた。異色の卒園生に大相撲の佐賀昇関がいる。両親を相次いで亡くし姉弟と入園、4年を過ごした。中学を終えて1977（昭和52）年、同じ佐賀県出身の元大関・大麒麟が親方の押尾川部屋へ入り、東前頭14枚目までのぼった。1996（平成8）年引退した。児童養

当時、老人は1階、2階に児童と同じ屋根の下で共同生活だった。72年から78年にかけて養護施設と老人ホームを別々に新築し、完全に独立させている。とはいえ秋の運動会はみんな一緒。近所の人も参加した。高齢者施設がほぼ要介護度の高い人で占められる現在からすると隔世の感がある。

■大麒麟が親方



田中由紀子さん



池田奈津美さん

集団脱走した園児を佐賀市まで迎えに行く。禁止されている川遊び中に溺れて亡くなった子。東

その苦労は長男の良徹・第4代理事長へバトンタッチする2008年まで44年余の長きに及んだ。【横田一】

社会福祉法人

風土記

《36》

佐賀県

佐賀県嬉野市の社会福祉法人「済昭園」(小佐々良徹理事長はこの秋、90周年を迎える。1928(昭和3)年、光桂寺境内でともした福祉の火は、19事業へ広がった。幼児から高校生までの児童養護(定員50人)、高齢者施設(養護老人ホーム、特養ホーム2カ所、

ケアハウス、住宅型有料老人ホーム2カ所)で暮らす約250人をはじめ、介護保険サービスを含めれば400人以上のお年寄りをケアする。社会的責任は重い。

「何を通らない」は前に紹介した。ほかに「和顔愛語」(明るく優しい言葉で)、「照顧脚」(反省は明日の)、「二期一会」(日々誠意を尽くす)、「主人公」

課長(38)は次のように示唆する。「お年寄りたち利用者には地域があり、その地域に職員の家族も暮らしている。地域の福祉力アップに尽くす。それが職員の誇り、働く幸せにつながる」と考えています。

郷土と人と労働観、幸福観をリンクさせたユニークな発想ではある。協道にそれるようだが、溝口さんは嬉野市生活支援コーディネーター

か、各地の施設が介護人材不足に悲鳴を上げる中、今年5人、昨年は10人の職員新採用に恵まれたという。

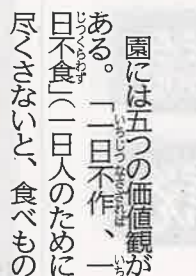
実はもとと法人を近隣へ開いてきた歩みがある。同じ町内の老人世帯へ毎週水曜夕方方の給食サービスを始めたのは1987(昭和62)年だった。地元の食材を使い、なじみの料理を心掛ける。

「うちでも毎月1日と15日の昼は赤飯を出しま

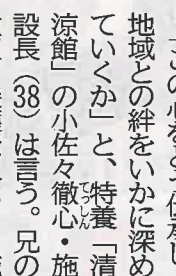
新たな福祉のこころを



小佐々あつ子
済昭園施設長



小佐々徹心
清涼館施設長



溝口道昭
生活相談課長

済昭園(下)

園には五つの価値観がある。「二日不作、一日不食」(一日人のために尽くさない、食べもの

(己も他人も大切)といった禅宗の理念だ。約240人いる職員へ内部研修会などで教えている。

「この心をどう伝承し、地域との絆をいかに深めていくか」と、特養「清涼館」の小佐々徹心・施設長(38)は言う。兄の徹正・養護老人ホーム施設長(41)と光桂寺第17世住職と知恵を絞る。

その方途の一端について、溝口道昭・生活相談

課長(38)は次のように示唆する。「お年寄りたち利用者には地域があり、その地域に職員の家族も暮らしている。地域の福祉力アップに尽くす。それが職員の誇り、働く幸せにつながる」と考えています。

郷土と人と労働観、幸福観をリンクさせたユニークな発想ではある。協道にそれるようだが、溝口さんは嬉野市生活支援コーディネーター

か、各地の施設が介護人材不足に悲鳴を上げる中、今年5人、昨年は10人の職員新採用に恵まれたという。



井上洋子
栄養調理課長

す。禅宗で厄払いの意味があるように、利用者には「きょうは朝日か」と日ごとに感覚を取り戻して楽しんでくれます」と清涼館の井上洋子・栄養調理課長(59)は言う。

「食」の話になったつ



西野厚史
生活相談課長



政田加奈子
栄養士

感謝の気持ち
それに応えるかのよう

に、今春高校を卒業し、16年7カ月間の園生活に

【横田】

理念を伝え、地域と絆深めながら



現在の済昭園の全景

た。また済昭園に来た時はさばの塩焼きを作って下さい」。

さて、地域へ戻ろう。

職員は近くの小学校へ向き「ケアとはなにか」をテーマに出前授業をこなす。養護老人ホーム(定員100人)の入居者は住民の高齢者とグラウンドゴルフ交流戦を年3回開く。多いときは300人も集まる。「ほかにクラブ行事や菜園を耕し、元気に過ごしています。でも、定員の4分の1は空きです」と西野厚史・生活相談課長(41)。

間もなく平屋建ての方の特養済昭園(小佐々あつ子施設長)の建て替え話が日程にのぼって

くる。個室が多床室かの検討や、少子高齢化や児童虐待の増加を背景にした福祉の変化へ対応が迫られる。「公益性、非営利性を示しながら、新しいビジョンが必要になってくる」(良徹理事長)。

そのスローガンを次のように掲げる。

「これからも、ここであなたと。」